

盾の勇者？いや午の戦士の成り上がり

椎名Niis

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

盾の勇者の世界に十二大戦、午の戦士、迂々真さんを転生させてみました。迂々真さんを知らなくても読めると思うので、是非読んでみてください。結構、アイディアは面白いと思うんです。十二戦士の中で一番の防御を誇る迂々真さんは適役ですよ。という事で迂々真さんの簡単説明。

『午』の戦士ー『無言で殺す』迂々真

本名、早間好実。

身長230センチ、

体重150キロ。

その類稀な体格を利用した攻撃は並の相手を捻り潰す。真に恐ろしいのは攻撃面よりも防御面。人間離れた耐久力を誇る体と鉄壁の防御術を組み合わせた『鎧』。これは並の攻撃ではかすり傷一つ付けることは出来ない。その身体能力は十二戦士の中でトップクラスを誇る。デカイ図体を誇る彼だが、口数がとても少ない。声を聞くのは戦士としての名乗りを除けば、彼の側近の者位しか居ないという。

服装

長ズボンに靴、お腹にはベルトの様な恐らく、防具。タンクトップではないが、体がデカすぎて、半袖より袖が短く見える半袖。両腕に鉄の四角い武器。頭に馬を模した兜。

こんなところを覚えておけば大丈夫だと思います。

作者の都合上、更新が不透明です。すみません。

目次

『午』の戦士―『無言で殺す』迂々真	1
勇者の始まり	6
不穏な流れ	11

『午』の戦士―『無言で殺す』迂々真

「おお……」

感嘆の声に午は我に返る。

視線を声が聞こえた方を向くと、ローブを着た男達がこちらを見て何やら啞然としていた。

「なんだ？」

視線を更に声が聞こえた方に向けると、自分と同じく、状況を飲み込めていないらしき男が三人。しかし、午と一括りにするには牛だけが浮いている。三人はいかにも私服という感じだが、午は武具を着けていて、更に一人だけ異様にデカイ。

午は思考を回す。

自分は確かに十二大戦で負け、命を落とした筈だと。ここはドコだ？自分が助かったのか？と

周りをよく見ると石造りの壁が見に入る。見覚えはない。見た事がない人々しか居ないので十二大戦という線は薄いと判断した。

そして、左腕に軽い盾があった。その盾は午の体格、武具との組み合わせで傍から見ればオモチャの様に見えた。そこには何時もなら馴染んだ武具があったはずだ。現に右腕にはその武具が着いている。外そうと思っても手から離れない。そして、着けていた武具は左手に握られていた。

そう思っていると、

「ここは？」

どうなっているのか気になっていいる所で、前に居た剣を持った男がローブを着た男に尋ねていた。

「おお、勇者様方！どうかこの世界をお救い下さい！」

「二はい？」

午を除いた三人の声が揃った。

「それはどういう意味ですか？」

情報が必要と思い、午は腕を組んで大人しく、話を聞く。

「色々込み入った事情がありますが、ご理解していただけの言い方で

すと、勇者様達を古の儀式で召喚させていただきました」

「召喚……」

午がここに来て初めて声を出した。もつとも誰にも聞こえない位、小さく呟いた程度だが。

「この世界は今、存亡の危機に立たされているのです。勇者様方、どうかお力をお貸しください」

ローブを着た男達が深々と俺達に頭を下げる。

「嫌だな」

「そうですね」

「元の世界に帰れるんだよな？ 話はそれからだ」

他の3人がすぐさま口に出した。

午は他の三人を愚かと判断する。

訳の分からない所に来てまず、すべきことは情報収集だ。それをこの三人は中途半端にしている。

よく見ると、少し興奮している様だ。

「人の同意なしでいきなり呼んだ事に対する罪悪感をお前らは持つてんのか？」

「仮に世界が平和になったらпойつと元の世界に戻されてはタダ働きですしね」

「こつちの意思をどれだけ汲み取ってくれるんだ？ 話によつちや俺達が世界の敵に回るかもしれないから覚悟しておけよ」

なんとも上から目線な態度だった。

何となく午は理解した。三人を見ると自分の見覚えのある服を着ていることから日本からランダムで四人が召喚とやらをされたのだと。そして、他の面々の言い方からここは異世界？ とやらと理解した。

「ま、まずは王様に謁見して頂きたい。報奨金の相談はその場でお願います」

ローブを着た男の代表が重々しい扉を開けさせて道を示す。

「…… しょうがないな」

「ですね」

「ま、どいつを相手にしても話は変わらねえけどな」

態度だけは牛より逞しい奴等はそう言いながら付いて行く。午もその後を続いて行く。

そうして、謁見の間に辿りついた。

「ほう、こやつ等が古の四聖の勇者達か」

玉座に腰掛ける偉そうな爺さんが俺達を値踏みして呟いた。

午はこの手の視線に慣れている。戦士として、午として護衛の依頼者などの余り、歓迎できないタイプと同じ視線だ。こいつは使えるのか？という視線。

「ワシがこの国の王、オルトクレイメルロマク三二世である。勇者達よ面を上げい！」

「さて、まずは事情を説明せねばなるまい。この国、更にはこの世界は滅びへと向かいつつある」

王様の話を纏めると、

現在、この世界には終末の予言というものが存在し、いずれ世界を破滅へ導く幾度にも重なる波が訪れる。その波が振りまく厄災を撥ね退けなければ滅ぶという。

それが今年で、このままでは厄災を阻止できないから、伝承に従って勇者召喚をしたらしい。

そうして、また三人の上から目線の発言が続いた。

そして、話が一段落したところで王様が話を変えた。

「では勇者達よ。それぞれの名前を聞こう」

すると、剣を持った少年が自己紹介を始めた。弓を持った少年まで終わった。やはり、全員午より年下だった。流石に喋らないと駄目かと判断し、午は話した。

『『午』の戦士―『無言で殺す』迂々真』

一人だけやはり浮いていた。自己紹介の内容もそうだが、見た目もだ。

迂々真（本名早間好実）は身長230センチ、体重150キロの巨漢で圧倒的に四人の中でデカイ。

王様はその迂々真を舐めるように見てきた。

「ふむ、レンにモトヤスにイツキか」

午は自分が抜かれていたが特に指摘はしなかった。

「では皆の者、己のステータスを確認し、自らを客観視して貰いたい」
午は少し、混乱した。ステータス?と

「えっと、どのようなようにして見るのでしょうか?」

樹がおおずおおずと王様に尋ねた。それに鍊が答えた。

「なんとなく視界の端にアイコンがないか?それに意識を集中するよう
うに見てみる」

午は鍊が言っていることを聞きぼんやりしてみると、視界の端にマークが見え、見ると。

ピコーンと軽い音がしてアイコンが表示された。

早間好実

職業 盾の勇者 Lv1

装備 スモールシールド(伝説武器)

異世界の服 異世界の武器

スキル 無し

魔法 無し

サラツと見てもまだまだ色々項目があった。

王様は更に話を続けた。

さっきのはステータス魔法という誰でも使える物。

これから冒険に行き、伝説の武器を強化すること。

四人一緒だと伝説の武器が反発するからそれぞれ仲間を集って冒険に出るなど午は黙って情報を聞いていた。

「今日はもう日が傾いておる。勇者殿、今日はゆっくり休み、明日旅立つのが良いであろう。こちらは朝までに仲間になりそうな逸材を集めておく」

そう言い、今日は王様が用意した来客部屋で休むことになった。

勇者の始まり

来客室のベツトに座る中、それぞれの武器を見てステータス画面を見ていた。それは午も例外ではなかったが、他の奴らと比べて、余り進んでいないようだ。それそうだろう。彼はゲームなどは幼い頃に軽くやった程度で、他のメンツと比べて知識が少ない。それでも地頭の良さで理解することができたようだ。

(武器を進化させるのか、まるで生物みたいだな。それに武器を変化させることでスキルといういわば特殊な能力が覚えられるということかなんとかなくだが理解することができてきた)

「つていうか、このゲーム俺知ってるぞ！」

元康と名乗っていた少年が自慢げに言い放った。

「とうにか有名なオンラインゲームだよな」

「……すまない。私はそういうのに疎い……」

「知らないのか！ エメラルドオンラインってんだ」

「は？ ブレイブスターオンラインだろこの世界観は」

「え？ デイメンションウエーブじゃないんですか？」

と、それぞれ違うゲーム名を上げてきた。

「まてまて、情報を整理しよう」

情報整理の結果、全員が違う日本から来たという結果になり、そして、来た理由の説明となっている。

「俺は学校の下校中に、巷を騒がす殺人事件に運悪く遭遇してな。一緒に居た幼馴染を助け、犯人を取り押さえた所までは覚えているのだが」

鍊がそう話した。

「なるほどな。じゃあ次は俺だな」

軽い感じで元康が自分を指さして話し出す。

「俺はさ、ガールフレンドが多いんだよね。それでちよーつと」

「二股三股でもして刺されたか？」

鍊が小ばかにするように尋ねる。すると元康は目をパチクリさせて頷いた。

「いやあ……女の子って怖いね」

そして、樹が胸に手を当てて話し出す。

「次は僕ですね。僕は塾帰りに横断歩道を渡っていた所……突然ダンブカーが全速力でカーブを曲がってきまして、その後は……」

「……………」

十中八九轢かれたのだろう。そして、ある法則が分かった。全員死んでここに来たということらしい。

「……私も話さなければダメか？」

「そりゃあ、みんな話しているし」

「……そうか……戦争……いや、大戦で死んだ。それでここに居た……………」

「……………」

そう午が話すと、三人は、ヒソヒソと本人の前で内緒話をし始めた。

「なあ、……あの体格といい、身なりといい俺達と少し違わないか？……………」

「それに……盾だし……」

「やっぱ……元康の所もそう？」

「ああ……」

こうも外されると情報を得られないので午は話し掛ける。

「それで……お前等は此処を知ってそうなんだがどういうところなんだ？」

「よし、元康がある程度、常識の範囲で教えてあげよう」

と軽く言ってきたが、注意しても進まない所以で午は無視し、話を聞いた。

「俺の知るエメラルドオンラインではな、シールド……盾がメインの職業だ」

「ああ」

「最初の方は防御力が高くて良いんだが、後半に行くに従ってな受けるダメージが馬鹿にならなくなってな」

「ああ……」

「高Lvは全然居ない負け組なんだ」

「なるほどな……」

午は特に落ち込むことも無かった。

(私には『鎧』がある。どうやらこの職業は前半は行けるらしい。逆に言えば『鎧』プラスこの伝説と呼ばれる盾は相乗効果を期待できるのではないか？そうすれば後半も行ける可能性はある。まあ、だが余り期待はしすぎないようにするか)

「勇者様、お食事の用意が出来ました」

情報を整理していると晩飯をご馳走してくれるらしい。

案内の人に食堂に案内された。そこにはバイキング形式で食べ物が置いてあった。

「皆様、好きな食べ物をお召し上がりください」

「なんだ。騎士団の連中と一緒に食事をするのか」

ぶつぶつ鎌が呟く。これから仲良くしていくべき騎士団相手に結構失礼な奴と午は思った。

「いいえ、こちらに(づ)用意した料理は勇者様が食べ終わってからの案内となっております」

「ありがたく頂こう」

「ええ」

「そうだな」

こうして異世界の料理を堪能した。

味は悪くないが見た目の料理とは違う味がして不思議だと感じた。結局、午はかなりの量の料理を平らげた。軽く他の三人が引くくらいには。彼の体は巨大なのでそれを維持するにはかなりの量が必要だから多く食べた。

そんなことがありながら食事を終え、部屋に戻り、就寝することになった。

翌朝。

かなり早く起きた午は部屋を出て、城にいた人に動ける場所に案内してもらい軽く運動をした。特に違和感もなかった。そして、朝食を

終え、王様からのお呼びを待った。

そして、呼び出しが10時過ぎくらいに来た。

謁見の間に向かった。

「勇者様のご来場」

謁見の間に行くところには、様々な装備をした、男女十二人ほどが集まっていた。

「前日の件で勇者殿の同行者として共に行きたいという者を募った。同行したい者達がおるようじゃ。さあ、未来の英雄達よ。仕えたい勇者殿と共に旅立つのだ」

どうやら均衡に選ぶのではないらしい。そちらの方がモチベーションの問題があると解釈し、納得した。

そして、

錬、五人。

元康、四人。

樹、三人。

午、0人。

となった。流石にこれには午も予想外だった。

(見てくれの強さだと私が一番に見えるのだが何かあったのか?)

そこへローブを着た男が王様に耳打ちをした。

「ふむ、そんな噂が広まっておるのか……」

「何かあったのですか?」

元康がそう尋ねる。

午はこの時点で、集団行動は苦手なので一人も居ないのはあれだが、大勢になるよりはマシと割り切った。後から仲間を集えればいいと考えてすらいた。

「ふむ、実はの……勇者殿の中で盾の勇者はこの世界に疎いという噂が城内で囁かれているのだそうだ」

「ふむ……」

午も理解できたきた。

「伝承で勇者とはこの世界を理解していると記されている。その条件を満たしていないのではないかと」

元康が話しかけてきた。

「昨日の雑談、盗み聞きされていたんじゃないか？」

「どうやらそうだと午も考えた。」

「均等に三人ずつ分けた方が良いでしょうけど……無理矢理では士気に関わりそうですね」

「……私は別に一人で構わないが、それでもいいか？」

「あ、勇者様、私は盾の勇者様の下へ行っても良いですよ」

「そう赤毛の女の子が名乗り出た。」

「他にウウマ殿について行っても良い者はおらんのか？」

「……誰も居ないようだ。」

「しよがあるまい。迂々真殿にはこれから自身で気に入った仲間を勧誘して人員を補充せよ。勇者殿には月々の援助金を配布するが、ウウマ殿には代価として他の勇者よりも今回の援助金を増やすとしよう」

「……ご配慮ありがとうございます……」

「必要な時に補充するの方が決められるより、やりやすいだろう。」

「それでは支度金である。勇者達よしっかり受け取るのだ」

「四つの金袋が配られた。」

「迂々真殿には銀貨800枚、他の勇者殿には600枚用意した。これで装備を整え、旅立つが良い」

「二はー」

「そうして謁見が終え、自己紹介を始めた。」

「えつと盾の勇者様、私の名前はマインⅡスファイアと申します。これからよろしくね」

「……よろしく、迂々真だ」

「とマイン気さくに話しかけてくる。」

「とりあえず……行くか」

「はい」

「元気良く頷き、後ろをマインは付いてきた。」

不穏な流れ

謁見が終え、支度金を貰い、マインとの自己紹介を終えた午は城下町に出た。予想通り、街は中世ヨーロッパのようで美しい街並み広がっていた。

「これからどうします?」

「……私は今装備しているもので戦っていた。だから、そちらが良ければ先にお互いの実力を確かめるべきと思う」

「それは頼もしいです。わかりました。私の方は準備は既に終わりますから、いつでも構いません。勇者様、それでは行きましょう」

午はマインの案内に従い、付いて行くと街の外の草原に着いた。そこにはオレンジ色の風船のようなものがあつた。

「あれはオレンジバルーンといつてとても弱いですが、とても好戦的なモンスターです」

「……では私からやろう」

「がんばってください!勇者様!」

午は構えもせず、無防備のまま、近づいて行く。

「ガア!!」

それに気付いたオレンジバルーンは敵意をむき出しに襲いかかってきて、噛み付いた。

「ガア!?!」

しかし、噛み付いたものはいいものも、午のあまりの硬さに逆にバルーンがダメージを受けた。

そして、驚いているオレンジバルーンに攻撃を仕掛ける。

殴ると、浮いているからダメージが効率的に与えられないと判断し、バルーンを掴む。そのまま地面に殴りつけた。衝撃を殺しきれないバルーンはそのまま簡単に破裂した。

(ふむ、やはり防御力が前より上がっている気がする。これが盾の勇者の力と言うやつか)

ピコーンと音がしてEXP1という数字がみえる。
経験値というやつだろう。

「凄いですね勇者様」

戦利品のバルーンの残骸を拾った。するとピコーンと盾から音がした。盾に近づけると、淡い光となり、吸い込まれた。

GETオレンジバルーン風船と浮かび上がった。

変化させるのはまだ足りないらしい。

これが伝説の武器の力ですか」

「……ああ、どうやらそうらしい。変化させるにはもう少し必要みたいだ」

「なるほど」

そこで思い出した。元々盾のあったところに着けていた武具が勿体無いと思っていたので、この際に吸わせてみた。すると、先程のように盾に吸い込まれてった

GET異世界の武具

異世界武具の盾の条件が解放されました！

異世界の武具

能力解放……装備ボーナス、鎧の強化

専用効果 防御力、攻撃力向上

装備ボーナスなどの説明を読んで、多少理解をした午。早速、盾を変化させてみると、右腕にある武具と同じ形をした盾になっていた。これで見えた目が、盾のせいで浮いていたが、幾らか、マシになっていた。

「おお、凄いですね」

「ふむ、後で詳しく、見てみようかでは次はそちらの力を見せてくれ」

「まあ、そうなりますよね」

早速、近寄ってきたオレンジバルーンをメインは軽く剣で一撃で倒した。

動きは悪くはない、これから成長すると思えば、素材としては悪くないと判断した。

「……とりあえず、今日はもつと進んで戦うか」

「はい」

そして、そこから森に入ったりして魔物を倒して行つた。その結果、オレンジバルーン、イエローバルーン、レッドバルーン、は盾に吸収できる最大数を越えることが出来た。

日が沈むにはかなり早かったが、初日ということで午とマインは城下街に戻ってきた。

マインの案内の元、武器屋に行つた。午にとっては特に必要なかったが、マインの装備のために来ていた。

「いらつしやい」

午と比べると、見劣りするが、筋骨隆々の店主が元気良く、出迎えてくれた。

「その変わった服装。あんたは盾の勇者様だな！残りの勇者達も来てたぜ」

「そういい、まじまじと見つめてきた。」

「はずれと聞いてたけど、この体格に武術の心得がありそうな佇まい。他の勇者達より肝が据わってるな。頼りになりそうだな」

「……『盾』の勇者の迂々真だ」

「よろしくな、アンちゃん！ところで、今日は他の勇者達と同じく、アンちゃんの装備を買いに来たのか？」

「連れの装備を整えに来た……私はこの装備で充分だからな」

「なるほど、確かに連れの装備はしっかりした方が良さいな」

マインが装備を見ているのを横目で見ながら迂々真は話を続ける。「ところで、……これはどこに行けば売れるんだ？」

今日倒した魔物を見せると親父は店の外を指さした。

「魔物の素材買取の店がある。そこへ持ち込めば大抵の物は買い取ってくれるぜ」

「……ありがとう」

そうして、情報を親父から聞いていると、マインはデザインが可愛

らしい鎧と妙に高そうな剣を持ってきた。

「勇者様、私はこの辺りが良いです」

「……合計どのくらいだ？」

「まあ、強そうなあんちゃんに特別オマケして五〇〇枚できあ」

流石に相手は勇者だからかなり妥協してくれているのだろうが、それでも半分以上持ってかれるのはキツイと思った。しかし、必要経費と思いい声に出さなかった。午はマインは見かけによらずかなり欲張り記憶しておく。

「……では、頼んだ」

「ありがとうございます。また、ご贖戻にお願いします」

「ああ、……また来る」

装備を新調したマインと宿屋に行った。

「二部屋で頼む」

銅貨60枚を出して、店主にお願いする。

「はい、かしこまりました」

そして、夕食として別料金の銅貨五枚×四を注文した。勿論言うまでもなく、そのうち三は午だ。

「……私達はここの草原からこっちの森で狩りをしたんだな？」

帰りに買った地図を指さしながら今日の復習をする午。

他の勇者達は昨日の態度から期待できないと思い、地理を知らない午はマインに確認をとる。

「はい。そうですね」

「で、次は何処に向かうべきだ？」

「実は今日の森を抜けた先にラファン村があつて、そこを抜けた先に初心者冒険者用のダンジョンがあるのでそこへ向かうべきかと」

「ふむ……」

「あまり、実りは無いでしょうがLvを上げるのに持ってこいかと思えます」

「……ありがとう。参考になった」

「いえいえ、ところで勇者様？ワインは飲まないのですか？」

料理と一緒に運ばれて来たワインを指さし、尋ねるマイン

「酒は好んで飲む方じゃないからな……それに戦いの前日とかは特に飲まない。明日のこともある。それにこんな世界に来たから、アルコールを取るのもっと落ち着いてからにしようと思っただけ」

「そうなんですか、でも一杯くらいなら」

「悪いな。明日に持ち込むと迷惑を掛けると悪いからな」

「そう、ですか」

「……早い睡眠は体に良い。今日は早めに休む」

「はい、また明日」

騒がしい酒場を後にし、割り当てられた部屋に戻っていく午。

銀貨の入った袋を机の下に置いておく。三百弱の銀貨、生命線になると思い大切に置いておく。

流石に武器を装備したままでは寝にくいと思ったが、盾が外れないので、頭の武器だけ外し、腕の武器は付けたままベットに横たわる。彼の体からしたらギリギリで少し窮屈に感じる。

ランプの火を消し、午はそのまま眠りに入った……。

……コソ。

……チャリ。

……バツ!!

午は意識を一瞬の内に覚まし、部屋の中にいる生き物に掴みかかる。戦士としての圧倒的な感覚だった。

「グツ?!」

「……何をしている？答えなければ……このまま首をへし折るぞ」

「……ゆう……しゃ……さ」

「……マイン……か……私の部屋で何をしている？」

掴んでいる正体がマインと気づき、一旦手を離す。

「ゲホツゲホツ。何をするんですか？」

「……それはこちらの台詞だ……私達の金を握って何をしている？」

よく見ると、マインの手には銀貨の入った袋が握られていた。

「あの……これは……えっと、あ、そうです！盗まれてないか、枚数を確認しよう………しまして」

「……それは今必要なことだったのか？……それに、私を起こして確認でもよいと思うのだが？」

「っ!?!……それは……起こすのは……しのびないと、思いまして」

「……まあ、いいだろう……このとおり、金の心配はしなくていい。安心していい………」

「……はい………失礼しました」

部屋を出ていくマインの背中を午は黙って見送った。

(まさか………だが………一応気をつけた方が良くもな)

対策を後日取ろうと判断し、午はもう一度眠りに着くことにした……。